設楽発掘通信

No.54
令和２年
７月号

令和二年度の発掘調査が始まりました

六月に入り、各遺跡で発掘調査が始まりました。はじめに重機を使っての表土掘削を行い、そのあと人による丁寧な調査が始まります。マサノ沢遺跡は、本発掘調査Aですので、トレンチ調査となり、すでに終了しました（詳しくは三頁をご覧ください）。上ヲロウ・下ヲロウ遺跡では、県道より南の調査区で表土掘削が始まりました。下延坂遺跡は、北部の狭い部分から始まりました。胡桃窪遺跡は県道を挟む２つの調査区で表土掘削の作業が行われました。国道沿いの添沢遺跡でも、表土掘削作業が始まりました。六月中旬から人力での掘削を始めましたが、早々に梅雨入りとなってしまいました。しかし、これまでの発掘調査成果や試掘調査の結果などを考慮しながら、新たなる成果に向けて、日々頑張っています。地元の皆様にも、より新しい成果について、いち早くお知らせできるよう、努めてゆきます。今後とも、どうぞよろしくお願いします。

（堀木真美子）

写真２　重機による表土掘削（上ヲロウ・下ヲロウ遺跡）

写真３　重機による表土掘削（下延坂遺跡）

写真４　重機による表土掘削（胡桃窪遺跡）

写真５　壁面の精査（添沢遺跡）

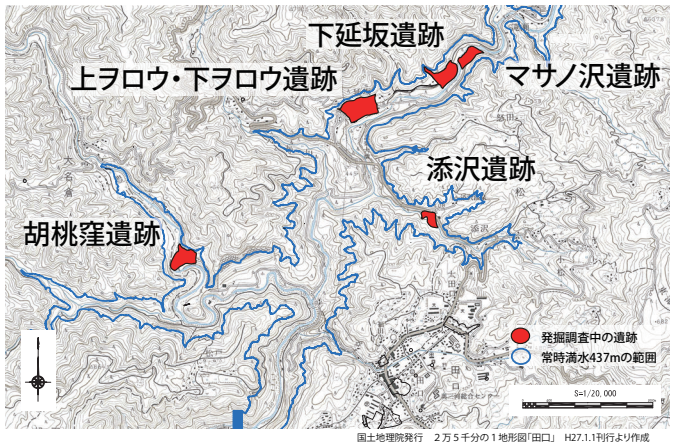


図１　令和２年度に発掘調査を実施する遺跡の所在地

写真１　トレンチの調査（マサノ沢遺跡）

上ヲロウ・下ヲロウ遺跡

六月から上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の発掘調査が始まりました。

写真６　上ヲロウ・下ヲロウ遺跡　遺構検出作業風景

写真７　上ヲロウ・下ヲロウ遺跡　縄文土器片出土状況

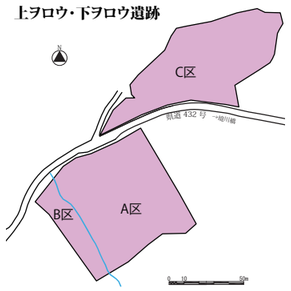
現在、表土掘削と遺構検出作業をおこなっています。

昨年度の調査では、江戸時代の屋敷地と土壙墓、縄文時代晩期の竪穴遺構などが検出されています。今年度の調査でも、江戸時代や縄文時代の遺構や遺物が検出される可能性が高いです。現在は、昨年度調査区に隣接する県道より南側のA区を調査しています。今のところ遺構は確認できていません。造成土や段々畑による攪乱により、道路に近い部分は遺構の残りがよくありません。しかし、遺物は出土しています。出土遺物は、江戸時代の陶磁器片や焙烙鍋片、縄文時代の土器片や打製石斧、剥片などがあります。また、写真７のように特殊な器形の土器片も出土しています。残念ながら、器形が分かる状態ではありませんが、外面が丸く膨らみ、内面が内側に屈曲していて、円筒形のような器形になることが予想されます。

まだ調査は始まったばかりですが、川側に向かうにつれ一部遺物包含層が残存しており、遺構が展開する可能性があります。次号以降で、新しい発見をお伝えしていけたらと思います。

（田中　良）

上ヲロウ・下ヲロウ遺跡



下延坂遺跡

六月十五日より、川向にある下延坂遺跡の発掘調査が始まりました。調査は町道79号川向境川線の山側にて、北東から南西に細長い調査範囲の北東側の半分をA区として開始しました。調査前の遺跡の風景は、宅地や畑が段々になっており、一部に植林がされていました。

調査は、地表面の土をバックホウで遺構の残る高さまで掘り下げて始めました。次に、掘り下げた地面を手刈り鎌などで削り、遺構を確認しました。これまでに見つかった主な遺構には土坑や溝があり、縄文時代晩期～弥生時代前期（約三千年前～約二千五百年前）の条痕文土器の深鉢片や安山岩の剥片などが土坑の中から出土しました。

これから調査範囲の南西側に調査を進めてまいります。試掘調査では弥生土器片も確認されており、今後の調査が楽しみです。

（蔭山誠一）

下延坂遺跡

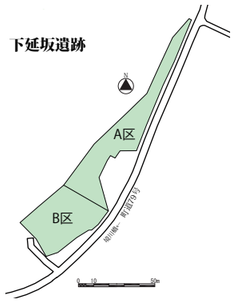


写真８　下延坂遺跡　発掘調査風景（A区北東側）

写真９　下延坂遺跡　条痕文土器片の出土状況（土坑 006SK）

写真 10　下延坂遺跡　弥生時代前期頃の土坑（土坑 002SK）

胡桃窪遺跡

胡桃窪遺跡は県道33号設楽瀬戸線を挟んで南北に分かれた斜面に面しており、南側を豊川（寒狭川）が流れております。遺跡全体の内、川に近い南側をA区、山の斜面に面した北側をB区と呼称しております。

A区は北と南の上下にわずかな段を有した緩やかな斜面になっており、表土掘削が完了し、上段では遺構検出と、遺構掘削を行っております。確認された遺構は30基近くあります。上段では確認された遺物は現在のところ、剥片と磨石の2点です。下段は範囲が狭く、傾斜面のため水がたまりやすいので、遺構検出は天気の状態を確認しながらの作業となります。今後、上段の遺構掘削と、下段の遺構検出を実施していきます。

B区は後世の造成の影響から四段に分かれており、一番下の段以外は東半分の表土掘削を終え、遺構検出に移るところです。現時点で二段目の東側に竪穴状の遺構が二基確認されています。その内の一つからは灰釉陶器片が見つかりました。このことから古代のものと考えられます。B区では事前の調査で縄文土器も確認されており、縄文時代の遺構も期待されます。今後は、A区の遺構掘削が完了した後に、B区の東側半分の調査を行っていきます。

発掘調査の成果はいずれ地元説明会等で皆様にご説明させていただく予定です。

（渡邉　峻）

胡桃窪遺跡

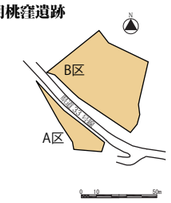


写真 11　胡桃窪遺跡の全景

写真 12　胡桃窪遺跡　A区発掘調査風景

マサノ沢遺跡

設楽町小松地区に位置するマサノ沢遺跡は、過去には平成29年度に発掘調査を行った遺跡です。その際には、縄文時代後期の配石墓や、弥生時代前期の土器棺墓などが検出されたほか、ハート形土偶の胴部や石錘などが出土しています。今年度はその北側で本発掘調査Aを行いました。本発掘調査Aとは、遺構や遺物が存在する範囲を確かめるための調査であり、トレンチと呼ばれる溝を重機によって掘り、出土する遺物や土層の堆積を調べました。

六月二日から十日にかけて、県道10号線を挟んで境川に近い北側と、コンクリートの建物跡が残る南側の両側で調査を行いました。出土した遺物は弥生時代や時期不明の土器片、石器、江戸時代の陶器などで、少量でしたが、遺物の含まれる層が道路北側に残っていることが分かりました。一方、道路の南側では建物を建てる際に地面を大きく削っており、遺物の含まれる層はほとんど残っていないことが判明しました。遺構は少数ですが、二箇所のトレンチで見つかっています。今回の調査結果をもとに、全体的に掘り下げて調査を行う本発掘調査Bを、来年度以降に行うかどうかが決定されることになります。

（河嶋優輝）

マサノ沢遺跡

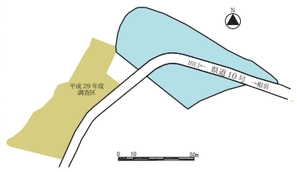


写真 13　マサノ沢遺跡での調査の様子（道路北側）

写真 14　マサノ沢遺跡　調査で見つかった遺構（中央左寄り）

万瀬遺跡の「倉」跡

昨年度発掘調査を行った万瀬遺跡では、通常とは異なり平面形が細長い掘立柱建物跡が見つかりました。その建物跡は『設楽町誌』掲載の絵図では「蔵」「堂」と記載されている辺りにあり、そこから、この細長い二つの建物跡が「倉」、特に江戸時代各地に作られた「郷蔵」の跡ではないかと考えました。今回は、愛知県内に現存する他の郷蔵などとの比較からこの建物跡を見てみたいと思います。

知られている限り、愛知県内に現存する郷蔵は、田内の郷倉（設楽町）、義倉蔵（西尾市）、谷田の郷倉（知立市）、狩宿郷倉（尾張旭市）の四箇所です。これらの特徴を比較して左の表にまとめました。田内に所在するものは土蔵造りでない点がほかと異なりますが、規模や基礎の面では尾張旭市の狩宿郷倉に近いものと言えそうです。では、万瀬遺跡のものと比べると、四箇所の郷蔵が全て、基礎の上に横材を渡して建物を建てる土台建物であるのに対し、万瀬の「倉」跡は穴を掘って柱を建てる掘立柱建物であるという差があります。また、万瀬の「倉」跡は建物の長辺が短辺の2～4倍の長さを持ちますが、四箇所の郷蔵では二倍未満となっています。屋根も瓦葺ではなく、現存する郷蔵とはかなり違う外観であったと思われます。

似たような建物跡を探してみると、同じ万瀬遺跡や、豊田市水入遺跡などに平面形が類似する大型の建物の事例があり（図2）、これらには倉庫としての利用が想定されています。年代の面から見ると、水入遺跡の大型建物は戦国時代、万瀬遺跡の大型建物は一六～一八世紀のものとされており、万瀬遺跡の「倉」跡は一八世紀後半ごろのものです。ここから考えると、万瀬遺跡の「倉」跡は、戦国時代から江戸時代まで使われた大型掘立柱建物の倉庫を、より小さい規模にしたものと言うことができるかもしれません。

（河嶋優輝）

表1　愛知県内の郷蔵の比較

	建築形式	屋根形式	屋根葺き材	入り口	基礎
田内	木造	切妻	鉄板	平側	礫・コンクリ
義倉蔵	土蔵造り	切妻	瓦	妻側	切石
谷田	土蔵造り	切妻	瓦	平側	コンクリ固め
狩宿	土蔵造り	切妻	瓦	平側	礫・コンクリ固め

写真16　義倉蔵（西尾市）

写真15　田内の郷倉（設楽町）

写真18　狩宿郷倉（尾張旭市）

写真17　谷田の郷倉（知立市）

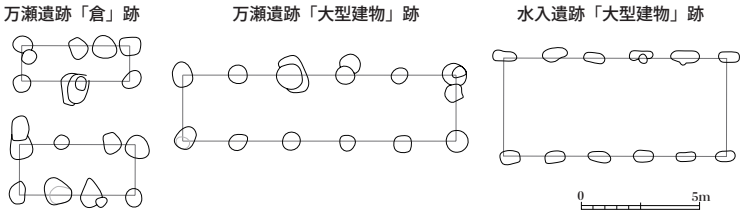


図2　「倉」に似た遺構（全て同じ縮尺）

設楽発掘通信
No.54
令和2年7月号
編集・発行　公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター
〒498-0017 愛知県弥富市前ケ須町野方802の24
電話 （0567）67-4161【管理課】4163【調査課】
ホームページ http://www.maibun.com
Facebook https://www.facebook.com/maibunaichi
Twitter https://twitter.com/aichi_maibun
印刷・協力　国際文化財株式会社